様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００３７３

研究課題名（和文）中国近代における「古典小説」概念形成に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Formation of the Concept of Classical Novels in Modern China

研究代表者
上原　徳子（UEHARA, Noriko）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：５０４５２９１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、本来海外での文献調査から、課題の考察を深めることを目的としていた。しかし、研究2年目にコロナ禍となり、方向性を修正した。近年は、様々な分野で翻案という考え方を通して文学作品の分析や検討がされていることから、本研究の対象をより有効にとらえなおすことができると考えた。分析対象とした映画は、原作と異なる構成となったが，完成作品では脚本の饒舌さがそぎ落とされ，観客自身が画面外の物語を含めて鑑賞する作品となった。この翻案が，紆余曲折を経て古典小説と同じように「多くを語らない表現」に行き着いたところにこの映画の特徴が有ったのであり、その表現方法自体が古典受容の一つの形だったという結論を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義としては、海外で出版された明代白話小説の英訳本を調査した結果、西洋で好まれる中国古典小説の題材の選定の傾向や、訳者が比較的入手しやすい中国古典小説を使用したのではないかという仮説が導かれたことが挙げられる。国際学会での口頭発表を通して、中国および欧米在住の研究者と意見交換できたことも収穫であった。また、唐代伝奇小説の翻案作品について調査したことで、映画とその原作である唐代伝奇小説との内容の比較を行い、現代人が古典作品の受容のあり方を考察することとなった。古典作品を現代の映像娯楽作品に翻案する現象にまで分析範囲を広げられたことは派生的成果といえよう。

研究成果の概要（英文）：This study was originally intended to deepen the discussion of the issue from an overseas literature review. However, in the second year of the research, the direction was modified due to the Corona disaster. In recent years, literary works have been analyzed and examined through the concept of adaptation in various fields, and we thought it would be possible to reconsider the subject of this study more effectively. Although the structure of the film analyzed differed from that of the original work, the verbosity of the script was stripped away in the finished film, and it became a work that the audience themselves could appreciate, including the off-screen story. The film was characterized by the fact that this adaptation, through twists and turns, ended up with “an expression that does not say much,” just like a classic novel, and we concluded that this method of expression itself was a form of acceptance of the classics.

研究分野：中国古典小説研究

キーワード：中国古典小説　翻案　受容

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本における中国白話小説の研究は、本格的には、魯迅に遅れること約 10 年、1925 年以降の「三言」の発見により始まったといえるだろう。辛亥革命以後、中国は近代国家として、自国の文化を「創出」しなければならない状況に直面した。知識人達は欧米あるいは日本の中国観を援用していったが、それは文学だけでなく書画など中国の文化の様々な範囲に及んだ。古典小説は、文言によるものと白話によるものの二つに大別される。そのうち白話小説は、言文一致の運動の中で、おおいに注目された。例えば胡適は、白話を基礎として標準語を創出し、近代国家としてその態勢を整えようとした。その中で、自国の文学特に古典小説について、近代的な方法で分析した代表的なものに魯迅の『中国小説史略』がある。この書で魯迅が述べたことは、今現在も概ね研究者の共通の認識となっている。

２．研究の目的

これまでの研究は概ね中国および中国人が自国から外へあるいは自国内で互いに行った言説を対象としてきた。当時、在外華人による海外での古典小説に関する言説はどのようなものがあったのか、研究は十分とはいえない。林語堂には多くの英語著作があるがその中には中国古典の英訳も含まれる。彼の行ったこれらの英訳活動は、前述の魯迅に代表されるいわば内省的文化概念構築活動とは異なり、中国の文化を欧米に積極的に紹介する。彼自身は、中国古典を基礎とし科挙受験を前提とした知識人と異なり、若い頃から英語に親しみ、英語で創作をした。林語堂に代表される外国語を自由に操る在外華人たちの活動からは、彼らが如何に古典文化と接触し、それをどうとらえるべきだと考えていたかを考察できる。

３．研究の方法

本研究は(1)中国古典小説研究初期の中国作品の日・欧・米に向けた発信情況についての調査、(2)日・欧・米の中国の古典小説の受容情況やそれを巡る言論活動に関する調査、(3)収集資料の分析と考察、(4)総括に分けて行う。

・調査目的と具体的内容

19 世紀末から 20 世紀初頭の古典小説の英訳の情況についての中国及び台湾の先行研究を整理することを通じて明らかにする。また、日本での研究情況についても、先行研究の再検討を行い不足があれば補う。

［国外調査］

台湾：林語堂故居、および台湾国家図書館、中央研究院において、関連の資料を調査する。
イギリス：大英図書館分館、Newspaper Library で 20 世紀初頭の新聞上の書評を調査する。
アメリカ：アメリカについては、国会図書館等で資料検索が可能なため、それを利用する。

［国内調査］

国会図書館関西館、東京大学東洋文化研究所を中心とした関東圏の大学等図書館、
国会図書館関西館

・分析・考察・発表

国際・国内学会参加

日本中国学会、中国古典小説研究会中国で開催される明代文学学会への参加・発表

論文発表

随時研究の成果を論文として投稿、発表する。

・総括

４．研究成果

本研究において得られた結果は以下の通りである。

（1）現代中国に導入されたフィクションの概念は、前近代中国の文化の中に、いわゆる「小説」としてすでに存在していたと結論づけることができ、林語堂は古典小説を近代化することなく英語に書き換えることで、古典小説の近代性を実証したのではないかという考え方を導き出した。

（2）近年は、中国文学に限らず様々な分野でアダプテーション（翻案）という考え方を通した文学作品の分析や検討をする研究成果が多く発表されていることがわかり、本研究が対象とする時代の諸作品の翻訳もそれらの成果を踏まえることでより有効にとらえなおすことができるという発見があった。コロナ禍により研究状況が整わなかったこともあり、方向性を修正することとした。

そこで、本研究の調査対象の一人であった中国近代知識人林語堂が英語翻案を行った唐代伝奇小説の翻案作品について調査したことから、それに関連した翻案作品として、2015 年に公開された映画『黒衣の刺客』とその原作である唐代伝奇小説「聶隠娘」との内容の比較を行った。古典作品を当代的作品に翻案する例だけでなく、当初念頭に置いていなかった古典を現代の映像娯楽作品に翻案する現象にまで分析範囲を広げられたことは派生的成果といえると考えている。

その結果、映画は原作と異なる構成となったが，完成した映画では脚本の饒舌さがそぎ落とされ，観客自身が画面外の物語を含めて鑑賞する作品となった。この翻案が，紆余曲折を経て古典小説と同じように多くを語らない表現に行き着いたところにこの映画の特徴が有ったのであり、その表現方法自体が古典受容の一つの形だったという結論を得た。

以下、本研究の調査と考察について、補足的に述べておきたい。

2019 年度は、主に先行研究の調査と、文献の調査収集を主な活動とした。また、中国古典小説研究会の大会に参加し国内外の研究者と交流し、広く知見を得た。結果として、短編白話小説「三言」の英語翻訳版を収集できた。英訳本を調査した結果、次の二点がわかった。一つは、ごく初期に英訳された中国古典小説の選択基準である。多くが愛情を扱っており、異国情緒を強調する内容となっている。二つ目は、当時訳者が比較的入手しやすい中国古典小説を使用したのではないかという仮説である。現在の研究情況を踏まえて、英語による論文一編を作成、投稿したが、査読の結果リジェクトとなったため、これらについての論考は発表できなかった。

2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、移動が自由にできなかったため、当初計画していた調査活動（台湾及びイギリスにおける文献調査および関東に所在する研究機関における文献調査）は行うことができなかった。本研究は、本来調査に基づいた考察と成果（論文）の発表という研究計画であったため、調査結果がなかったことから、自ら成果物を計画通り出すことができなかった。

しかしながら、オンラインで口頭発表を二つ行うことができた。

まず、国際学会「第四届世界論壇」（世界漢学研究会主催［幹事校ヴィッテン大学（ドイツ）］）において「外語版〈杜十娘〉小考」を口頭にて発表した。この学会は多くの中国人研究者、また欧米の研究者が参加しており、本研究がアメリカでの中国古典小説の翻訳を対象としていることから、海外在住の中国人研究者との議論は大きな収穫となった。

また、所属機関内の研究会「中国語圏地域人文学研究会」（立命館大学中国語圏地域人文学研究会主催）において、口頭発表「英語版「杜十娘」について―近代における中国古典小説受容として」を行った。当日は質疑応答によって非常に有意義な意見交換を行うことができた。

当該年度は、計画通りの活動は難しかったが、出発点となった翻訳作品「杜十娘」そのものについて改めて考察を深めることができた。

2021 年度は、やはり当初予定していた台湾・イギリスでの調査は海外渡航が難しい状況があったため計画通りの調査はかなわなかった。さらに、府県をまたいでの移動が困難な状況が長く続いたこともあり、勤務先の図書館以外での調査を行うことができなかった。そこで、主に資料を購入することとオンラインによる資料収集にあてた。

前述の通り、対象と分析の方向を修正し、アダプテーションについて英語・中国語・日本語で書かれた先行研究にあたる作業を行った。方向としては、英語で書かれた諸研究にあたった。

2022 年度は、中国古典小説研究初期の状況調査は進まなかったが、現代における古典作品の翻案の調査から分析対象が広がり、具体的な作品分析をすることになった。これが、2022 年度研究ノート「唐代伝奇「聶隠娘」についての一考察　―映画との比較から―」（『立命館産業社会論集』58(3)、145-157 頁）として発表した内容となった。ここでは、本研究の調査対象の一人であった中国近代知識人林語堂が英語翻案を行った唐代伝奇小説の翻案作品について調査したことから、それに関連した翻案作品として、2015 年に公開された映画『黒衣の刺客』とその原作である唐代伝奇小説「聶隠娘」との内容の比較を行った。年度末には東京において対面で中国古典小説研究会の例会に参加し、開催時点での他機関の状況や中国・台湾等の状況、各データベースの利用について情報を交換し、今後の研究にいかすことができた。なお、継続して関連資料書籍の収集は続けた。

研究期間を延長した 2023 年度は、本研究の最終年度であり、調査分析と成果の発表を同時に行うことを予定していた。オンラインと国内機関を中心に調査を行い、並行して分析と成果発表を行った。予算の残額から、欧米での調査は不可能であったことから、台湾での調査を想定していたが、本予算による海外調査は実行できなかった。そこで、前年度に引き続き、古典小説の現代における受容の一つとして、前年度に引き続き 2015 年公開の侯孝賢監督による映画『刺客聶隠娘（邦題は『黒衣の刺客』）』についての分析を進めた（「現代における中国古典小説

受容―侯孝賢監督による映画『刺客聶隠娘（黒衣の刺客）』を題材として―」（『立命館言語文化研究』35(1)、193-210 頁））。この映画は国際映画祭で最優秀監督賞を受賞した武侠映画である。論文では、監督自身や脚本制作に携わった人々の意図を彼らのインタビューやメイキング本に基づいて検討した。脚本の製作段階では、歴史資料に基づいて正確な描写を目指し、ヒロインが刺客として暗殺にいたる理由を現代の観客にわかりやすくする努力がなされていたことがわかった。得られた結論は前述の通りである。この論文の作成と並行して、古典小説の英訳に関する書籍の収集、林語堂の英訳作品に関する文献の収集を進めたが、論文として年度内に完成させるには至らなかった。

以上総括すると、本研究の開始からまもなくしてコロナ禍となり、思うように研究が進められなかったこと、できる調査の質から、当初の見込みとは違い、林語堂の英訳を足がかりに当時の知識人の小説意識を探るのではなく、現代における古典小説の受容という方向での考察を進めることになったことにより、当初の目的を果たしたとはいえない結果となった。予定していた海外渡航もできず、順調な研究とは言いがたい。しかし、この間収集した資料は、今後の中国古典小説の受容研究に貢献する価値があるであろうし、今後も継続した研究と発信を続けていく用意がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 上原徳子	４．巻 58(3)
２．論文標題 唐代伝奇「聶隱娘」についての一考察　―映画との比較から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 立命館産業社会論集	６．最初と最後の頁 145-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上原徳子	４．巻 35(1)
２．論文標題 現代における中国古典小説受容―候孝賢監督による映画『刺客聶隱娘（黒衣の刺客）』を題材として―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 193-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 上原徳子
２．発表標題 外語版〈杜十娘〉小考
３．学会等名 第四届世界漢学論壇（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 上原徳子
２．発表標題 英語版「杜十娘」について―近代における中国古典小説受容として
３．学会等名 中国語圏地域人文学研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関